

2020年5月3日(日)礼拝メッセージ

聖書箇所：ヨハネ 14章 18～26節 (P214)

タイトル：「イエスを愛する人」

ヨハネの福音書 14章からお話ししています。きょうはその3回目となりますが、「イエスを愛する人」という題でお話しします。

イエス様は、弟子たちと最後の晩餐を持たれると、ご自分がこの世を去って父のみもとに行くと言われました。何のことを言っているのかわからなかった弟子たちは、いったいどこに行かれるのかわからず、自分たちはどうなってしまうのかと思うと不安になりました。そんな彼らにイエスは、こう言われました。「あなたがたは心を騒がせてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。」(14:1) なぜなら、父の家には住む所がたくさんあるからです。そこに場所を用意したら、また来て、彼らを迎えに来てくださるからです。天の御国が用意されていることがわかれば、どんなに平安なことでしょうか。

そればかりではありません。前回のところには、さらに3つのことが約束されていました。何でしたか。それは第一に、キリストを信じる者は、キリストが行うわざを行い、さらに大きなわざを行うということでした。第二に、主はご自身の名によって求めることは、何でもそれをしてくださいます。そして、第三のことは、主を信じる者には助け主を与えてくださいます。その方は真理の御霊です。この方が彼らとともにいて、いや彼のうちにいて助けてくださいます。だから恐れることはありません。心を騒がせてはならないのです。

きょうの箇所はその続きです。きょうは、イエスを愛する人というテーマで三つのことをお話しします。第一に、イエスは、私たちが捨てて孤児にはしないということです。聖霊によって戻って来られるからです。いつですか。「その日」です。その日には、わたしが父のうちに、あなたがたがわたしのうちに、そしてわたしがあなたがたのうちにいることが、あなたがたに分かります。

第二のことは、そのような神との交わりの中に入れられる人はどのような人でしょうか。それは、キリストを愛する人です。キリストを愛する人は、キリストのことばを守ります。

そして第三のことは、そのために聖霊が助けてくださるということです。どのように助けてくださるんですか？父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。

I. あなたがたを孤児にはしません (18-20)

まず 18 節から 20 節までをご覧ください。

「18 わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません。あなたがたのところに戻って来ます。19 あと少しで、世はもうわたしを見なくなります。しかし、あなたがたはわたしを見ます。わたしが生き、あなたがたも生きることになるからです。20 その日には、わたしが父のうちに、あなたがたがわたしのうちに、そしてわたしがあなたがたのうちにいることが、あなたがたに分かります。」

イエスは、「わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません。」と言われました。なぜなら、再び彼らのところに戻って来られるからです。どのように戻ってこられるのですか。19 節には「あと少しで、世はもうわたしを見なくなります。しかし、あなたがたはわたしを見ます。」とあります。どういうことでしょうか。あと少しで、世はわたしを見なくなるとは、イエスが十字架で死なれ、この世から去って行かれることを意味しています。それでこの世はもうイエスを見なくなります。「しかし、あなたがたはわたしを見ます。」弟子たちはイエスを見るようになります。どのようにして見るのでしょうか。「わたしが生き、あなたがたも生きることになるからです。」どういうことですか。二つの意味があります。一つは、イエスが死からよみがえられるので、彼らは復活したイエスを見るようになるということです。もう一つのことは、そればかりではなく、その後、イエスが天に昇って行かれ、約束の聖霊をお遣わしになることによって、見るようになるということです。そのことが20 節に書かれてあります。「その日には、わたしが父のうちに、あなたがたがわたしのうちに、そしてわたしがあなたがたのうちにいることが、あなたがたに分かります。」「その日」とはこの後でペンテコステの日のことを指しています。それは使徒の働き 2 章に記されてありますが、弟子たちが同じ場所に集まっていたとき、天から突然、激しい風が吹いて来たかのような響きが起こると、彼らが座っていた家全体に響き渡りました。また、炎のような分かれた舌が現れ、一人ひとりの上にとどまると、皆が聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、他国のことばで話し始めました。いったい何が起こったのか。約束の聖霊が降ったのです。それは、旧約聖書に預言されていたことでした。ヨエル書 2:28 にはこうあります。「その後、わたしはすべての人にわたしの霊を注ぐ。あなたがたの息子や娘は預言し、老人は夢を見、青年は幻を見る。」

この預言が成就したのです。ヨエルは、B. C. 830 年頃の預言者ですが、当時エルサレムを襲ったいなごによる災害を通して、終わりの日に起こる恐ろしい幻を語りました。その日、畑に多くの種を持って出ても、彼らは少ししか収穫することができません。いなごが食い尽くすからです。ぶどう畑を作り、耕しても、そのぶどう酒を飲むことも、集めることもできません。虫がそれを食べるからです。ではどうすれば良いのか。きよめと断食の集会を開かなければなりません。つまり、神の前に悔い改めなければならないのです。もし、彼らが心を尽くし、断食と、涙と、嘆きをもって、主に立ち返るなら、主は彼らをあわれみ、祝福してください。まず物質的に祝福してください。

「23 シオンの子らよ。あなたがたの神、主にあって、楽しみ喜べ。主は、義のわざとして、初めの雨を与え、かつてのように、あなたがたに大雨を降らせ、初めの雨と後の雨を降らせてくださる。24 打ち場は穀物で満ち、石がめは新しいぶどう酒と油であふれる。25 「いなご、あるいは、バッタ、その若虫、噛みいなご、わたしがあなたがたの間に送った大軍勢が食い尽くした年々に対して、わたしはあなたがたに償う。26 あなたがたは食べて満ち足り、あなたがたの神、主の名をほめたたえる。主があなたがたに不思議なことをするのだ。わたしの民は永遠に恥を見ることがない。」(ヨエル 2:23-26)とあるとおりです。

しかし、そればかりではありません。その後、霊的にも祝福してくださると言われました。それがこれです。「その後、わたしはすべての人にわたしの霊を注ぐ。あなたがたの息子や娘は預言し、老

人は夢を見、青年は幻を見る。」

「その後」とは、物質的に祝福してくださった後ということです。その後、主はすべての人に「わたしの霊」を注ぐと言われました。すると、あなたがたの息子、娘は預言し、老人は夢を見、青年は幻を見るようになります。素敵ですね。息子や娘は預言し、老人は夢を見、青年は幻を見るのです。

「いつでもゆめを」です。「いつでも夢を いつでも夢を 星よりひそかに 雨よりやさしくあの娘はいつも 歌ってる」

聖霊が注がれると、息子娘は預言し、老人は夢を見、青年は幻を見るのです。聖霊が注がれると、神のみこころが一人一人にはっきりと示されるのです。曖昧にはありません。はっきりと、です。それまでは、神のみこころがわかりませんでした。ぼんやりしていました。しかし、その日聖霊が注がれると、はっきり見えるようになります。それがペンテコステの出来事でした。ヨエルは、その日のことを預言しましたが、それがそのとおりに起こったのです。つまり、主が弟子たちに「あなたがたのところに戻って来ます」と言われたのは、この聖霊を通してのことだったのです。

「その日には、わたしが父のうちに、あなたがたがわたしのうちに、そしてわたしがあなたがたのうちにいることが、あなたがたに分かります。」どのようにしてわかるのですか？聖霊を通してです。弟子たちには、イエスが言っていることがどういうことなのかよくわかりませんでした。イエスはなぜ十字架につけられなければならないのか、なぜ死ななければならないのか。また、父のもとに場所を用意しに行くとはどういうことなのか、そして、もう一人の助け主を遣わして下さるとはどういうことなのか、さっぱりわかりませんでした。チンプンカンプンだったのです。しかし、その日には分かります。すべてがわかる。イエスが言われたこと、イエスが教えられたこと、それがどういうことなのかははっきりわかるのです。イエスが、「あなたがたを捨てて孤児とはしません」と言われた意味がわかるようになるのです。

ほんとうに感謝ですね。もしイエスがどこに行ってしまったのかわからなければ、これまでの自分の人生はいったい何だったのかということになってしまいます。まさに孤児です。人はだれかに見捨てられるということほど辛いことはありません。今、毎週日曜日の夜、NHKでヴィクトル・ユゴー原作の「レ・ミゼラブル」を放映しています。そこに出てくる少女コゼットは、別に見捨てられたわけではありませんが、母親は生きるために通りがかりの宿屋に彼女を預けざるをえませんでした。そして、働くために街に出かけて行ったのです。やがて娘を引き取りに戻って来ようとしたが、残念ながらその願いは叶わず、母親はそこで死んでしまいました。コゼットはもう二度と母親に会うことはできませんでした。孤児として孤独に生きなければならなかったのです。そんな彼女を引き取ったのがジャン・バルジャンでした。でも、それまで彼女はどれほど孤独だったのでしょうか。そんな孤独の人生を生きなければなりません。

弟子たちもそうです。もしキリストが彼らのもとを去って行くだけだったら、彼らも孤独だったでしょう。しかし、主は彼らを捨てて孤児にするようなことは決してなさいませんでした。やがて彼らのもとに戻って来られるからです。聖霊を通して。その日には、わたしが父のうちに、あなたがたがわたしのうちに、そしてわたしがあなたがたのうちにいることが、あなたがたに分かります。

イエスが十字架で死なれることによって、しばらくの間彼らはイエスを見ることができなくなりますが、その日には見るようになります。まず三日目によみがえられることによって、そして、十字架で死なれてから五十日目に聖霊が降られることによってです。その日には、イエスが父のうちに、彼らがイエスのうちに、そしてイエスが彼らのうちにいることが、分かるのです。

Ⅱ. イエスを愛する人 (21-24)

次に、21 節から 24 節までをご覧ください。

「21 わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛している人です。わたしを愛している人はわたしの父に愛され、わたしもその人を愛し、わたし自身をその人に現します。」22 イスカリオテでないほうのユダがイエスに言った。「主よ。私たちにはご自分を現そうとなさるのに、世にはそうなさらないのは、どうしてですか。」23 イエスは彼に答えられた。「だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます。24 わたしを愛さない人は、わたしのことばを守りません。あなたがたが聞いていることばは、わたしのものではなく、わたしを遣わされた父のものです。」

この部分は、前の文脈と関係ないかのように見えますが、全部つながっています。イエスは、「その日には、わたしが父のうちに、あなたがたがわたしのうちに、そしてわたしがあなたがたのうちにいることが、あなたがたに分かります。」と言われました。つまりその日には、父と子と聖霊の三位一体の神との麗しい交わりの中に入れていただけるということですが、そのような交わりの中に入れていただけるのは誰かということです。ここには、「わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛している人です。わたしを愛している人はわたしの父に愛され、わたしもその人を愛し、わたし自身をその人に現します。」とあります。それは、キリストの戒めを保ち、それを守る人です。キリストの戒めを保ち、それを守る人は、キリストを愛する人です。そういう人は父に愛され、またキリストにも愛され、キリストご自身を現してくださいませ。あなたはどうですか？キリストを愛しておられますか？

では、キリストを愛しているかどうかということ、どうやったらわかるのでしょうか。どうやって証明することができるのでしょうか。それはキリストの戒めを保っているかどうか、キリストの戒めを守っているかどうかでわかります。キリストの戒めを守る人は、キリストを愛している人です。キリストを愛している人はキリストのことばに従いますが、そうでない人は従うことができません。従いたくないのです。キリストのことばよりも、自分の思うように生きていきたいと思っているからです。どんなに表面的に愛しているようでももしそのことばに従っていないとしたら、それは愛しているとは言えないのです。愛するとは従うことであり、従うことが愛しているということだからです。それがキリストを愛していることの証明なのです。キリストが言われることがどうということなのか分からなくても従わなければなりません。なぜなら、主のことばは完全ですから、今はわからなくても、後でわかるようになるからです。

そのように主を愛する人に、主はご自身を現してくださいませ。弟子たちはイエスを愛していたので、イエスに従いました。ですから、イエスが復活された後、彼らにご自身を現して下さったのです。しかし、信じない人たちには現わしてくださいませませんでした。当時のユダヤ人指導者たちには現れませんでした。ただイエスを愛し、イエスに従った人たちにだけに現わしてくださいませるのです。

それは私たちに対する約束でもあります。私たちもイエスを愛しています。イエスを見たことはないけれども愛しており、見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びに踊っています。アーメンですか？それは、信仰の結果であるたましいの救いを得ているからです。もしかすると、様々な試練の中で悲しまなければならないことがあるかもしれませんが、むしろそれは私たちの益のためであり、私たちが多くの実を結ぶために刈り込みをして下さっているのです。そう信じているからこそ忍耐して、信仰に堅く立つことができるのです。そういう人にはご自身を現わしてくださいませ。

どのようにしてイエスは私たちに現れてくださるのでしょうか。別に、夢や幻によって現れるというわけではありません。時々私たちはそのようなことを期待することがありますが、実はそのほとんどは、神のことば、聖書のことばを通して現れてくださいます。イエスは、ご自身を愛する人は、主のみことばに従うと言われました。ですから、私たちが毎日聖書を読み、聖書を学び、聖書の言葉に従うなら、その中で主は現れてくださるのです。皆さんもそういう経験があるでしょう。御言葉を読み、祈っている時に主の臨在に触れるということが。本当に不思議です。私も何度も経験しています。できればこの目でみたいと何度も祈りましたが、そのような形では現れてはくれませんでした。しかし、聖書を読んで祈っている中で、主は何度もご自身を現わしてくださいませました。また、みことばと祈りに従って行動する中で、見せてくださいませました。

たとえば、私が福島で牧師をしていたとき、新会堂建設に取り組んだ時がありました。その時に与えられたみことばは、創世記 26:22 のみことばでした。

「イサクはそこから移って、もう一つの井戸を掘った。その井戸については争いがなかったので、その名をレホボテと呼んだ。そして彼は言った。「今や、主は私たちに広い所を与えて、この地で私たちが増えるようにしてくださいませ。」(創世記 26:22)

何だこれ?と思いましたが、考えてみると、私たちが6畳2間の借家から開拓伝道をスタートしたのは1983年のことでしたが、あれから10年、教会が大きくなるにつれて場所を移動し、その時が3回目でした。イサクもその地に井戸を掘って3回目でした。それまでは、何度掘ってもその地の住人と争いがありましたが、3回目に掘った井戸については争いがなかったので、その地を「レホボテ」と呼んだのです。意味は「広々とした地」です。まさか?と思いましたが、それが主から与えられたみことばと信じて祈った結果、近くの広々とした土地が与えられたのです。そこは600坪もありました。しかし、そこは調整区域になっていて建物が建てられないところ所でした。けれども、主は不思議な方法で道を開いてくださり、5年半の年月の後に開発許可も与えてくださいませました。それは私たちには考えられないことでしたが、神が与えてくださったみことばとその実践の中で、主がご自身を現わしてくださいませました。

私たちはどちらかというとなにかをすることによって主がご自身を現わしてくださるのではないかと考えがちですが、そうではなく、主はみことばを通してご自身を現わして下さいます。キリストを愛している人は、キリストの言葉を守ります。そういう人は父に愛され、イエスご自身を現わして下さるのです。ですから、神秘的に考える必要はありません。聖書を読んで祈ってください。そして、聖書の言葉に従ってください。そうすれば、主はあなたにも必ずご自身を現わして下さいますから。

22節をご覧ください。すると、イスカリオテでないほうのユダがイエスに言いました。「主よ。私たちににご自身を現わそうとなさるのに、世にはそうなさらないのは、どうしてですか。」(22)

イエスの弟子たちの中に、ユダという名前の人がもう一人いました。もう一人というのは、イスカリオテのユダと他にもう一人ということです。ここにはイスカリオテでないほうのユダとありますから、これはヤコブの子ユダのことです(ルカ 6:16)。彼は自分たちにはご自身を現わされるのに、どうして世にはご自分を現さないのかとイエスに尋ねました。彼がこのように尋ねたのは、その前のところでイエスが、自分を愛する者にご自身を現わしますと言われたからでしょう。もし王であれば、みんなにわかるように自分から現した方がいいんじゃないですか。そうすれば、みんながあなたを認めるようになるし、あなたもすんなりと王になることができますよというのです。つまり、彼のメシア観がずれていたのです。彼が期待していたのは自分たちをローマから救ってくださる政治的な王でした。何もこれは彼だけではなく、当時の一般的なユダヤ人たちのメシア観でもありましたが、当時は一般的にメシアであれば世のすべての人に分かるような形でご自身を現してくださると考えられていました。しかし、イエスが来られたのはそのためではありませんでした。ルカ 19:10 に、「人の子は、失われた者を捜して救うために来たのです。」(ルカ 19:10)とあるように、イエスが来られたのは、失われた人を捜して救うためでしたが、彼にはそのことがわかりませんでした。

いったいどうしてこのようなずれが生じたのでしょうか。関心事が違っていただけからです。彼らの関心事は自分の目の前にある問題から救ってもらおうことでしたが、イエスの関心事は、そうした問題のすべての根源である罪から救うことでした。このようなずれは当時の人々だけでなく、現代の私たちにもよくあることです。私たちもイエスを信じた者としてイエスの弟子であると思っていますが、私たちの思いとイエスが求めておられることがずれていることがあります。きっとそうであるに違いないと思いながら、実際のところかなりずれているということがあるのです。つまり、聖書が何と教えているかということよりも、他の人たちは何と言っているかとか、自分はどう思うのかということが判断の基準になっていることがあるのです。そこにイエスの考えとのずれが生じるのです。私たちは他の人たちが何と言っているかということではなく、聖書は何と言っているのか、神のみこころは何なのかということをも、みことばそのものから受け止めなければなりません。そうでないと、風に吹き飛ばされるもみ殻のように、どこかに吹き飛ばされてしまうことになります。

そこで主は、ご自分が語られたことの真意を繰り返して語られました。23節と24節をご覧ください

い。ご一緒に読みましょう。「23 イエスは彼に答えられた。「だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます。24 わたしを愛さない人は、わたしのことばを守りません。あなたがたが聞いていることばは、わたしのものではなく、わたしを遣わされた父のもので。」

これは、15 節と 21 節で語られたことの繰り返しです。主が同じことを繰り返して言われる時は、それがとても大切な教えであるということです。15 節と 21 節では「わたしの戒めを守る人は」とありますが、ここでは「わたしのことばを守る人」と言い換えられています。これは同じことと考えて差し支えないでしょう。では、「わたしの戒め」とか、「わたしのことば」とは具体的に何を指しているのでしょうか。それは広い意味では聖書全体を指しますが、もっと狭い意味では、あるいは、この文脈から言えることは、13 章 34 節でイエスが教えられたことであると言えます。そこでイエスはこのように言われました。

「わたしはあなたがたに新しい戒めを与えます。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」(13:34)

神を愛するとは、具体的には兄弟姉妹を愛することです。神を愛していると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見える兄弟に無関心な者に、目に見えない神を愛することなどできないからです。神を愛するという人は、兄弟をも愛すべきです。つまり、この愛に生きるということ、これがイエスの新しい戒めであり、聖書が教えていることです。

あるとき、律法の専門家がイエスのところに来て、こう尋ねました。「先生、律法の中でどの戒めが一番重要ですか。」

するとイエスは彼に言われました。「37『あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。』38 これが、重要な第一の戒めです。39 『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい』という第二の戒めも、それと同じように重要です。40 この二つの戒めに律法と預言者の全体がかかっているのです。」(マタイ 22:37-40)

律法の中で、一番重要な戒めは何ですか。それは、心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして、あなたの神である主を愛することです。二番目に重要なのは何ですか。「あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい。」ということです。この二つの戒めに律法と預言者、つまり、聖書全体がかかっているのです。これがイエスの戒め、神のことばの中心です。神を愛し、隣人を愛すること、兄弟姉妹を愛することです。神を愛し、隣人を愛するなら、あなたは神のみことばに従っていると言えます。あなたが、心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして主を愛するなら、また、あなたの隣人をあなた自身のように愛するなら、あなたは、聖書のみことばに従っていると言えます。これがイエスを愛するということなのです。

「そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます。」

すばらしい約束です。そうすれば、父はその人を愛し、私たちはその人のところに来て、その人とともに住みます。このところをよく見てください。ここには、「わたしたちは」とあります。「わた

し」ではなく「わたしたち」ですと、複数形で書かれてあります。どういうことですか？そうです、これは三位一体の神を表しているのです。父と子と聖霊の三位一体の神のことです。私たちの神は、この三位一体の神です。この三位一体の神が、主を愛する者たちとともに住んでくださるのです。わかりますか。聖霊によって、父と子と聖霊の神が、あなたの心に住んでくださるのです。

しかし、イエスを愛さない人は、イエスのことばに従いません。弟子たちはどうでしたか。弟子たちはイエスを愛していたのでイエスに従いました。しかし、ユダヤ人たちはそうではありませんでした。ユダヤ人たちは、イエスのことばを信じませんでした。彼らは、自分たちは神を信じていると言いました。自分たちは聖書の教師であり、聖書のことを何でも知っていると主張していましたが、実際にはその聖書の中心であるイエスを拒んだのです。イエスがなされた奇跡を歓迎しましたが、イエスが父と一つであると言われると、それを認めなかったばかりかイエスを憎み、イエスを十字架に掛けて殺してしまいました。彼らはイエスを愛しませんでした。イエスのことばに従わなかったのです。

私たちは、信じない者にならないで、信じる者になりましょう。愛さない者にならないで、愛する者になりましょう。従わない者にならないで、従う者となりましょう。いったいどうしたら従うことができるのでしょうか。

Ⅲ. 聖霊が助けてくださる (25-26)

それが第三のことです。すなわち、聖霊の助けによってということですから。25節と26節をご覧ください。「25 これらのことを、わたしはあなたがたと一緒にいる間に話しました。26 しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。」

イエスは弟子たちと一緒にいる時、これらのことを何度も話されました。十字架のことも話しました。復活のことも話しました。でも霊的に鈍感な弟子たちは、何回聞いてもよくわかりませんでした。その時はわかったような気がしても、次の瞬間にはすっかり忘れてしまったのです。右の耳から入ってすぐに左の耳から抜けて行きました。それは何も弟子たちだけではありません。私たちも同じです。すぐに忘れてしまいます。皆さんは、昨日の夜何を食べたか覚えていますか。一昨日はどうですか。ほとんど覚えていません。ひどいものになると、今食べたものさえ覚えていないことがあります。私はよくありますよ。今食べたばかりなのに、何を食べたか覚えていないということが。危ないですね。1か月前のこと、2か月前のことになると、もうお手上げです。全く覚えていません。私はよく家内に、「あなたは35年前にこう言った」とか言われることがあります。35年前のことまで覚えているのはすごいです。昨日言ったことを忘れていて、35年前のことは覚えているんですから奇跡です。私たちは本当に忘れっぽいのです。何回聞いても忘れてしまいます。しかし、神はそんな私たちにすべてのことを教え、また思い起こすことができるように、聖霊を遣わしてくださいました。この方は、「助け主、すなわち、父がイエスの名によってお遣わしになる聖霊」とあります。

本当にすぐに忘れてしまうような私たちが、イエスが教えてくださったことを思い起こすことができるように助けてくださるのです。

これを書いたのは弟子のヨハネです。彼は何歳の頃これを書いたと思いますか。90歳を過ぎていたと言われていました。もうよぼよぼのおじいちゃんですよ。でも記憶力は衰えていませんでした。彼は90歳になって、30年以上も前のことを思い出しながらこの書を書いたのです。イエスが初めからなされたこと、話されたこと、それらを全部思い出して書きました。でもそれは彼の記憶力が良かったからではありません。聖霊が彼に特別に働いて思い起こさせてくださったのです。彼の記憶力はだめです。全くだめというわけではなかったでしょうが、若い時のように覚えていることはできなかつたでしょう。今話したことさえ「あれっ、何だっけ」となってしまうのです。でも、聖霊が思い起こさせてくださったので書くことができました。

それはヨハネだけではありません。私たちも同じです。私たちも信仰を持つまでは聖書を読んでもチンプンカンプンでした。今もチンプンカンプンの時がありますが、それでも聖書のお話を聞くとわかるようになりました。頭がいいからではありません。聖霊が助けてくださるからです。聖書は聖霊によって書かれたものですから、聖霊によらないと理解することができません。そして、私たちがイエス様を信じた瞬間、聖霊が私たちの内に住んでくださったので、罪について、義について、さばきについてわかるようになりました。この聖霊がすべてのことを教えてくださるのです。

ですから、日々の生活の中で困った時には祈ってください。聖霊があなたにすべてのことを教え、すべてのことを思い起こさせてくださいます。あなたは今、心が騒いでいますか。イエス様は何と言われましたか。

「あなたがたは心を騒がせてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。」(ヨハネ 14:1)
あなたの心は疲れていますか。イエス様のことばを思い出してください。

「すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」(マタイ 11:28)

あなたの心は渴いていませんか。イエスはこう言われました。

「だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになります。」(ヨハネ 7:37-38)

このように、聖霊は私たちに神のことばを思い起こさせてくださいます。そしてあなたを慰め、あなたを励まし、あなたを助け、あなたを導いてくださいます。聖霊はあなたと共に、いや、あなたのうちにおられます。この助け主であられる聖霊によって、イエスのことばを思い出し、イエスのことばに従いましょう。イエスを愛する人はイエスに従います。主はそのような人にご自身を現わしてくださるのです。